

## 授記品四箇の大事

### 第一 授記の事 じゆき 文句の七に云はく「授は是これ与の義なり」と。

御義口伝に云はく、記とは南無妙法蓮華經なり、授とは日本国の一切衆生なり。不信の者には授けざるなり、又之これを受けざるなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經の記を受くるなり。又云はく、授記とは法界の授記なり。地獄の授記は悪因なれば悪業の授記を罪人に授くるなり。余は之に准じて知るべきなり。生の記有れば必ず死す、死の記あれば又生ず、三世常恒の授記なり。所詮中根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり。迦か葉しょうは生の相、迦旃延かせんねんは老の相、目連もくれんは病の相、須菩提しゆぼだいは死の相なり。法華に来たりて生老病死の四相を四大声聞と顕はしたり。是即ち八相作仏なり。諸法実相の振る舞ひなりと記を授くるなり。妙法の授記なるが故に法界の授記なり、蓮華の授記なるが故に法界清浄なり、經の授記なるが故に衆生の語言音声三世常恒の授記なり。唯一言に授記すべき南無妙法蓮華經なり云云。

### 第二 迦葉光明の事 かしょうこうみょう

御義口伝に云はく、光明とは一切衆生の総号なり。光とは地獄のとうねんみょうか灯燃猛火、此即ち本覺自受用の智火なり。乃至仏果も之に同じ。今日蓮等の類南無妙法蓮華經の光明を謗法の闇冥あんみょうの中に指し出だす、此即ち迦葉の光明如来なり。迦葉は頭陀ずだを本とす。頭陀はこ爰とそうに抖擻と云ふなり。今末法に入って余行を抖擻して、専もっぱら南無妙法蓮華經と修する此經難持・行頭陀者これ是なり云云。

### 第三 捨是身已の事 しゃぜしんい

御義口伝に云はく、此の文段より捨しゃ不捨ふしゃの起こるなり。転捨にして永捨ようしゃに非ず。転捨は本門なり、永捨は迹門なり。此の身を捨つるは煩惱即菩提・生死即涅槃の旨に背そむくなり云云。所詮日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは捨是身已しゃぜしんいなり。不惜身命の故なり云云。又云はく、是の身を捨ほどこすと読む時は、法界に五大を捨ほどこすなり。捨つる処の義に非ず。是の身を捨て、仏に成ると云ふは権門の意なり。かゝる執情を捨つるを捨是身已と説くなり。此の文は一念三千の法門なり。捨是身已とは還歸本理げんきほんり一念三千の意なり。妙楽大師の「当に知るべし身土一念三千なり。故に成道の時、此の本理かなに称ひて一心一念法界あまねに遍し」と釈するは此の意なり云云。

#### 第四 宿世因縁 吾今当説の事

御義口伝に云はく、宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり。下根の為に宿世の因縁を説かんと云ふ事なり。因縁とは因は種なり、縁は昔に歸る義なり。もとづく<sup>もとづく</sup>と訓ぜり。大通結縁<sup>だいつうけちえん</sup>の下種にもとづく<sup>もとづく</sup>と云ふ事を因縁と云ふなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は過去の因にもとづきたり。爰<sup>ここ</sup>を以て妙樂大師云はく「故に知んぬ、末代一時に聞くことを得、聞き已<sup>お</sup>はって信を生ぜん事<sup>すべから</sup> 須く宿種なるべし」と。宿とは大通の往事なり、種とは下種の南無妙法蓮華經なり。此の下種にもとづく<sup>もとづく</sup>を因縁と云ふなり。本門の意は五百塵点の下種にもとづく<sup>もとづく</sup>べきなり。眞実妙法の因に縁<sup>もとず</sup>くを成仏と云ふなり。